

## 『住まい』

今もあつた賄いつき下宿  
人生相談にも乗る「おばさん」

春4月、今年も新入生を迎えた。これからの大学生活に向け希望と期待に胸を膨らませていることだろう。その一方で、未知への不安も抱えていよう。とくに不慣れな一人暮らしにとまどうことも多いに違いない。でも何でも相談できる「おばさん」がいる賄いつきの下宿が今でもあつた。シリーズ『大学と地域』の第1回として「住まい」をテーマに、昔懐かしい「下宿」と、いま主流の「アパート」についてレポートする。

京王線南平駅から歩いて8分ほど。2月下旬の

ある日、訪ねた『平下宿(Taira Youth Mansion)』は、

ところどころにまだ空地のある住宅地の一角にあつた。鉄筋コンクリートづくりの3階建て(新館)だ。勝手に思い描いていた「下宿」のイメージとは違って、きれいな建物だ。駐車場もあり、

数台のバイクと車が止めてあつた。

オーナーである平君子さんが、玄関に立って「いらっしゃい」と明るく笑顔で出迎えてくれた。頭

には赤いバンダナを巻き、失礼ながらもとても65歳には見えない。取材に伺った時はちょうど夕飯時間が終わるころで、エプロン姿であわただしい様



「平下宿」新館の外観

子だった。

きっかけは「定年のない仕事」  
37年目。男子学生22人が下宿

平さんが学生下宿を始めたのは、1971年。

農協から融資を受け、自宅敷地に木造2階建て(8部屋)を建てて、開業した。中央大学の多摩移転(1978年)から遡ること7年前だ。多摩地区の学生下宿の先駆けと言っていいたいだろう。今年で37年目になる。

学生下宿を始めたのは、「定年がなく一生働け



食事時の語らいも楽しみ

る仕事があった」からという。下宿する学生は、初めは明星大学など他大学生だったが、中央大学の移転が決まってからは中大生が入居、しばらく駿河台まで通う学生もいた。その後は中大生がメインになった。

9年前には新館（3階建て14部屋）を建てた。ちようど敷地の建物が道路の拡張工事に引っかったことで資金が入り、それを元手にした。

現在は新館と旧館を合わせ、22人の男子学生が下宿（賃料は1カ月新館が85000円、旧館が

65000円）している。そのうち中大生が8人で、他は帝京、法政、工学院などの学生だ。個室は11・5×12・5平方メートルで、新館1階には、食堂兼談話室はじめ洗濯室、風呂、シャワールームなどの共用設備がある。

食堂は談話室を兼ねているが、1階にある平さんの居間もみんなの語らいの場になる、という。アットホームな場面に目に浮かんでくる。

### 「食事の心配がいらす、勉強に集中 身体壊した」と入居する学生も

夕食を終えたばかりの鹿島隼人さん（経済学部1年）は、「毎日のご飯の心配も要らないから勉強に集中できる。それに下宿には友達もいるから息抜きもできる最高の環境です」と話してくれた。平下宿では平日朝夕2回の賄いつきであるため、毎日の食事の心配が要らない。しかも「毎回栄養のバランスを考え、違うメニューを出している」と平さんはいう。

記者も地方から出てきて一人暮らしをしているが、何の束縛も無く、自由を謳歌できる反面、炊事など自分でしなければならぬのが大変で、家に帰っても「おかえり」と言ってくれる家族もないので、ある種の孤独との戦いでもある。

「アパート暮らしで毎日、コンビニ弁当ばかり食べて腸炎になり、『身体を壊しちゃった』からと言って入居してくる学生もいるのよ」と聞くと、他人ごとではない気がする。

中央大学は多摩にキャンパスを移転した際、近隣の地主の人たちに協力を呼びかけ、『中央大学協力下宿』を建てていただいた。平下宿もそのひとつになったが、平さんは大学の窓口である厚生課から「こんな学生がいるので面倒をみて欲しい」とよく相談されたという。

「当時は中央大学とよく連絡をとっていて、大学はとても身近に感じていましたね。引きこもりになったり、父親が亡くなって学費に困ったりした学生を受け入れたこともありまして」と平さんだが、1997年2月に、『協力下宿』も含めて、アパート紹介・斡旋業務が、大学厚生課から生活協同組合に全面的に移管されてからは、大学との連絡も自然に少なくなっていた、という。

### 母親代わりの下宿の「おばさん」 朝まで人生について語り合いも

平さんは、下宿する学生から「おばさん」と呼ばれる。下宿をはじめたときからだから、20歳代後半から、ずっと「おばさん」である。母親代わ



「おばさん」こと平君子さん

「友達がいるから寂しくない。資格取得のためWスクールしているんですが、平下宿だと勉強に集中できる」と原部周司さん（法学部1年）。「途中で一人暮らしを考えたけど、めんどくさいからやめた。おばさんに言われているときは『うるさい』と思うことがあるけど、言ってもらえることはありがたい」と神谷佳輝さん（法学部4年）は感謝する。

りでもあり、「説教することがあったり、けんかをしたりする事だつてある」。

取材中も食事中の学生に向かって、「好き嫌いしていたらダメよ」「両親に対する感謝の気持ちを忘れないでね」などと注意する。親元を離れ、地方から出てきた学生には、いろいろな不安だらけだ。勉強、サークル、友人関係、アルバイト、それに故郷にいる両親のことなど、平さんはなんでも相談に乗る。「人生について朝まで語り合うことも少なくないという。」

「昔の学生は今よりずっと頑張り屋だった。今は大学全入時代なんて呼ばれているから、昔と比べてハングリーさにかけている気がする」と平さんの学生を見る目は厳しい。「大学生活では、ただ机に向かって勉強するだけではなく、下宿できただ友人、先輩や後輩との共同生活を通して人間関係を育み、学んでほしい。ひとつだけでなく、二通りも三通りも考えられる力がつくようになると思います」

### 200人以上が社会に巣立つ 出張ついでに立ち寄るOB

平下宿では、新入生歓迎会に始まり、OBとの交流会、クリスマスパーティー、忘年会、追い出しコンパなどを開いている。それが、同僚や先輩、後輩らいろんな人とのコミュニケーション力をつ

ける機会になっている。アパートの一人暮らしでは味わえない「下宿」のよさが、そこにある。

「中大生は昔から面倒見がよくてね。学生たちのまとめ役になってくれる。昔も今も弁護士や公認会計士などの資格取得のためによく勉強している。でも昔に比べ、今は自分のことで精一杯なようにみえるわね」

実際に司法試験に合格して法曹界で活躍している卒業生も多くいる。社会人になったOBたちが、



食事の後片付けに忙しい

家族を連れて訪ねてくることも度々ある。「出張で東京に来たので寄った」と土産持参で来るOBも少なくない。

これまで37年間で、中央大学を含め200人以上が平下宿から社会に巣立っていった。60歳になったとき、「少子化だし、今時賄いつきの学生寮でもないだろうから、やめようと思った」とい

う。でも、かつて下宿していたOBが訪ねてきて「おばさん。僕たちの家が無くなってしまいうから続けてくれよ」と説得され、考え直した。

「元気に身体が動くうちはやり続けたい。定年がない仕事だからね」と、平さんは食事の後片付けの手を休めずに笑った。

(学生記者 伊藤知広 経済学部3年)

## 男子70%以上、女子27%が一人暮らし 人気は大学周辺で、5〜6万円の7〜8畳間

大学に入学して真っ先に行うのが、4年間の暮らしの拠点となる「住まい」探し。地域の環境、交通の便、それに経済的観点から十分に考えて決めねばならず、ことは重大だ。中央大学の学生は、一人暮らしをするにあたり、どのように住まいを選んでいるのだろうか。そこで2月末、ヒルトップ2階に特設されたアパート相談会場を訪ねてみた。

毎年、新入生を対象にした住まいの斡旋は、中央大学生協同組合がアパート相談の特設会場を

設けて、行われている。今年も、推薦で合格した学生を対象に2月1日から2月7日まで斡旋が行われ、その後、全合格者を対象に2月18日から3月20日まで行われた。

アパート紹介業務は1997年2月までは、大学の厚生課が行っていたが、それを境に全面的に

生協に業務移管された。

特設会場に掲示、紹介されている物件は、およそ1000室。大学周辺エリア(通学距離1〜3

キロ、堀之内・東中野・大塚地区)、多摩センターエリア(同3〜3.5キロ)、百草園・中河原・調布エリア(同3〜5キロ)、万願寺・高幡不動・程久保エリア(同1〜3.5キロ)、南平・平山・北野エリア(同2〜5キロ)に分類され、紹介さ

れている。



親子で相談しながら部屋探し

れている。

会場には、一人暮らし経験のある学生スタッフがアドバイザーとして常駐しており、一人暮らしの相談をしたり、アドバイスをもらうこともできる。

住まい探しに訪れる新入生は、ほとんどが保護者と同伴で、いろいろ条件を付き合わせて相談しながら決めている。貼り出されている物件から2件を選び、気に入った物件が見つかったら、タクシーで現場に行き、部屋を決めるという手順で行

われる。

そこで幹旋業務を行っている「株式会社学園中央開発」の浦崎文博さんに、学生の住まい探しの現状について聞いた。同社は2001年4月に設立された中央大学生協の子会社で、年間を通じて住まいの幹旋を行っており、生協仕様の鉄筋コン



### 住まい探しの新入生らでにぎわう特設会場

クリートづくりの『C's(シーズ)シリーズ』賃貸マンション36棟950室を管理している。

「特設の幹旋会場では、毎年1500名前後の住まいの幹旋、ご紹介をしています」と浦崎さん。学生の人気は、大学周辺や高幡不動、万願寺、多摩センターなど大学に10分程度で通える地域に集

中。多くの学生は、自転車やバイクで通えて交通費がかからない場所を希望する、という。

生協の住まいの幹旋係が2006年に調べた「中大学生一人暮らしの実情」によると、人気トップは大学周辺エリア(57・8%)で、次いで万願寺・高幡・程久保エリア(21・4%)、多摩センターエリア(7・7%)、南平・平山・北野エリア(7・0%)、百草園・聖跡桜ヶ丘・中河原エリア(5・8%)の順になっている。

もうひとつ重要な家賃は、3万円台から8万円台まであり、人気は5万円から6万円。平均は共益費込みで53000円前後のようだ。部屋の広さは7〜8畳が人気。また、新築ないしはリフォーム済みで、床はフローリング。トイレとバスが別れたタイプが主流という。女子学生の場合は、

防犯を考えて2階以上の部屋を希望する人が多い。自炊する人が増えたため、二つ口コンロを希望する学生も増えている。

「中大学生一人暮らしの実情」によると、2006年時点で男子学生の73・3%、女子学生の26・7%が一人暮らしだ。

下宿ではなく、大学生の多くが一人暮らしをする現状について浦崎さんは、「人との関わりが希薄になってきたということでしょうか」と分析する。また「賄い(食事) つきの下宿というのは、ほとんどなくなっていました」という。

賄いつきを希望する学生がいた場合は、学生会館を紹介、案内するそうだ。

大学生協連合会調査(07年度)によると、全国的にみても学生の住まいはアパート(43・3%)とマンション(37・1%)が大半を占め、下宿や寮に住むのはひと握りになっているという。

記者は、今の大学生は昔の大学生に比べて、個人でいる時間と仲間といる時間をきちんと分けているように思う。集団でいることをあまり好まず、一人の時間を大事にする。コミュニケーションが求められる下宿が敬遠されるのは、その辺に誘因があるのではないかと気がした。

(学生記者 上田雄太II文学部3年)

## 🏃 スポーツの応援情報は、このサイトから! 🏃

学生イベントカレンダーは、学生が参加するスポーツ競技会の開催情報や結果をはじめとして、学生主催の講演会、演奏会などの情報を学生が独自で入力し、中央大学の公式Webサイトや学内の電子掲示板に掲載する仕組みです。



中央大学のトップページ

このバナー  からどうぞ!

学生が発信する  
イベント・競技情報

[www.chuo-u.ac.jp](http://www.chuo-u.ac.jp)

### 学生イベントカレンダー

- イベント全体
- スポーツ大会・競技会  
(主催・参加)
- 講演会・講演会  
(主催・参加)
- 一般学生主催のイベント